

平成 23 年 10 月 21 日 静岡新聞

ウエアやシューズ バンングラで復活へ

清水商高がプロジェクト

11.10.21

部活動を引退して使わなくなったトレーニングウエアやシューズをバンングラデシュに送り、再利用してもらう「BUKATSUアイテム復活プロジェクト」が今月、静岡市清水区の市立清水商高で本格的に始動した。市内在住のバンングラデシュ人らが橋渡し役になり、来年初めにも第1陣を現地へ向けて送る。

使わなくなったウエアやシューズなどを持ち寄る生徒―静岡市清水区の市立清水商高



と、2人が中心となった呼び掛けに清水商高が応じ、今年の夏から各運動部に働きかけ、準備を進めてきた。初の回収日になった20日は、昼休みに生徒たちが段ボールやビニール袋にいっぱいになったウエアや靴を持ち寄り、1日でウエア11箱、シューズ6箱分が集まった。仕分けを担当する生徒会の若林侑弥会長は「予想以上の量が集まりうれしい。少しでも僕たちの服や靴が役になれば」と満足げに語った。

年明けに第1陣部活動の不用品送る

プロジェクトは、清水けニアズさんによると、商高OBで同市の会社社 首都タツカの北東約35キロ長宿田雅穂さん(43)が、にある出身地のナルシン知人で飲食店など経営す ディでは、貧富の差が激るバンングラデシュ人のニしく、スポーツ用のウエアズ・アハメドさん(40) アヤシューズを用意でき 同市から、現地の話 ない人も多いという。を聞いたことがきつ 現地に運動用品を送ると抱負を語った。



高校生が部活動で使用し、使わなくなったトレーニングウェアやシューズを出身地のバンングラデシュ・ナルシンディへ送る「BUKATUアイトム復活プロジェクト」の中心メンバー。留学のため来日、現在は静岡市内で飲食店や服飾店を経営

この人

40歳。プロジェクトの発足にはどんな背景があるか。「バンングラデシュは経済成長が進む一方、貧富の差も広がっている。出身地も高級ホテルの真横にスラムがある状態。古着でも喜ばれ、故郷の役

不用になった運動用品をバンングラデシュへ送る ニアズ・アハメドさん(静岡市駿河区)

「に立ちたいと考えた」
—今後の計画は。
「第一弾として、清水商高で回収した品物は、来年初めに計画している市バンングラデシュ交流協会の訪問団に同行して、現地を手渡す予定になっている」
—バンングラデシュの良いところは。
「人々が優しく温かいところ。日本人と似ていると思う。日本にいい印象を持つ人も多く、静岡とバンングラデシュの交流を深めていきたい」
◇ 自身もスポーツが得意。学生時代はサッカーやバドミントンに熱中した。

平成 24 年 1 月 24 日 静岡新聞

部活の不用品 提供呼び掛け

1/24

清水商生徒会

3月に
再回収

市に協力要請

プロジェクトは、部の高次などからも「活動を引退して使わなくなった衣類や靴などを貧困層が多いとされるバングラデシュで再利用してもらう活動。昨年10月に活動を始め、取り組みを報じたニュースを見た県内外の高校などからも「活動に賛同したい」などの反響があるという。卒業時期となる今年3月に提供を呼び掛け、現地に送る予定。

静岡庁舎を訪れた前生徒会長の若林侑弥さん(17)、プロジェクト

静岡市立清水商高の生徒会役員らが23日、市役所静岡庁舎に田辺信宏市長を訪ね、同校が始めた「BUKATSU(部活)アイテム復活プロジェクト」の経過報告と活動推進に向けた協力を訴えた。



不用になった部活用品の回収活動への協力を呼び掛ける清水商生徒会関係者ら

静岡市役所静岡庁舎

を担当した前ホームルーム対策委員長の大滝周平さん(18)、現委員長の鈴木悠太さん(17)らは「資源リサイクルの新しい形といえる。清商モデルとして全国に発信したい」と話し、現地に送る際の資金援助や活動を機に、バングラデシュとの交流促進などを求めた。

田辺市長は「支援の在り方を考えたい。アジア各国を提供先に広げられる可能性もあり、今後の展開に期待している」と語った。

「静岡市バンングラデシュ交流協会」設立

文化や人材で“絆”深める



協力を呼び掛けるニアズさん(左) 静岡市葵区

静岡市とバンングラデシュの文化や人材の交流を深めようと、市民有志と市内在住のバンングラデシュ人らがこのほど、「静岡市バンングラデシュ交流協会」(林芳久仁会長)を設立した。

物資支援、県内拡大へ

12.5.23

発起人は会社社長宿田雅稔さん(43) 静岡市 市やバンングラデシュ人のニアズ・アハメドさん(41) 同市 市ら。昨年10月、市立清水商高の部活動で使った衣類などをバンングラデシュに送るプロジェクトを始めた。

同プロジェクトの活動を県内に広げ、物資での支援を行う。学生間の交流の窓口業務も担っていく。

20日夜、同市葵区で開かれた設立記念パーティーには、賛同する企業関係者ら約20人が訪れた。ニアズさんは「母国では経済成長が

進む一方で、貧富の差が拡大している。多くの人に交流を深めてもらいたい」と話している。